猫蓑通信

第111号
特大号
令和二年
（2020年）
4月15日発行
（年4回発行）

中日韓朝言語比較文化研究
国際シンポジウムに参加して

東アジアの過去現在未来と連句

平林香織

二〇一九年八月二十日から二十三日まで、中国の吉林省延吉（イエンジー）市にある国立延辺（イエンビエン）大学で、第六回中日韓朝言語比較研究国際シンポジウムが開催された。ひょんなことから招待講演者としてお招きいただき、二日目の八月二十一日に「連句の風景・遊びと学び――大名の点取俳諧と連句の教室」というタイトルで講演を行った。なぜそのような貴重な機会をいただくことができたのか。それは連句がつないだご縁による。

図們川鉄橋（中朝国境）の中国側

猫蓑会の内田遊眠さんと松本功さんが、毎月第四月曜日の夜、羊座連句会をなさっている。文京区の蕎麦屋が会場で、時間のあるときお邪魔して、連句やおいしいお蕎麦を楽しんでいる。そこで日本語学者の佐々木瑞枝さんと何度かご一緒した。内外で広く活躍している方だ。

ある日、瑞枝さんから連絡があり、天津外国語大学の元学長で、明治期の日本漢語について研究しておられる修剛（シューガン）先生が来日中だから、一緒に食事でも、というお誘いを受けた。聞くと、修剛先生は創価大学に研究員として短期滞在中だという。私はこの春、岩手医科大学教養教育センターから、創価大学文学部に異動したばかりだ。ところが三人の日程が合う日がまったくない。とくに修先生は、現在教育庁（日本の文部科学省に相当）のさまざまな仕事をしておられるため、来日中も中国や日本の要人との会合や、中国人による日本語スピーチコンテスト審査員など、ハードスケジュールを消化しておられた。

結局、三人で会うことは不可能とわかり、修先生がもうすぐ中国にお帰りになるという七月下旬のある日、修先生がわざわざ私の研究室を

●目次●

東アジアの過去現在未来と連句……平林香織 1
中日韓朝言語比較文化研究
国際シンポジウムに参加して
第百五十二回例会
令和二年初懐紙　歌仙七巻 4
第百五十一回例会
明雅忌　源心七巻 8
令和元年俳諧芭蕉忌正式俳諧 10
第二十二回えひめ俳口全国連句大会
入賞歌仙六巻 12
第二十三回えひめ俳口全国連句大会
入賞歌仙三巻 15
えひめ俳口全国連句大会に参加して……荒木　鑑 16
井上井月・馬場凌冬の俳諧……17
井月・凌冬・まだら
両吟歌仙三巻　三吟半歌仙一巻
温故知新　19：歌うネアンデルタール……19
事務局だより 20

●発行遅延のお詫び　今号の発行も大幅に遅延したことをお詫びします。遅延の原因の多くが解決しましたので、次号以降は当分の間、発行間隔を狭めるとともに増ページを続け、作品未掲載を解消してゆく所存です。何卒ご諒承ください。（鈴木丁斎）

訪ねてくださった。名刺交換をして数分間の自己紹介のあと、先生がおっしゃった。「ところで平林先生、中国へいらっしゃいませんか？」「は？」「私は、延辺（イェンビェン）大学で八月に行われるシンポジウムの招待講演者を探しています。」「え？」

なんでも、予定していた講演者の先生のご都合が悪くなったため、主催者から修先生に連絡があり、「日本にいるのだから一両日中に別の講演者を探すように」という無茶ぶりがあったとのこと。ところが、あいにく私は、シンポジウムの最終日である二十三日に成田からミラノへ旅行に出る計画を立てており、すでに航空券も手配していた。そのことを告げ、だから無理だと話すと、修先生は「大丈夫です！　なぜなら延辺大学は延吉（イェンジー）空港の眼の前にあります。先生の講演を二日目の朝一番にして、講演が終わったらすぐに飛行機に乗れば、ミラノへ行く二日前に日本に戻れます」とニコニコ即答なさった。初対面の一瞬のやりとりで、こんなにてきぱきコトを進める人は見たことがない。

私もグルグル思考を早回ししながら、講演の日は一か月後であまり準備の時間はないが、連句のことなら少しお話できそうだし、中国内外の参加者に連句のすばらしさを知っていただく良い機会だ、と考えを巡らせ、お引き受けしてしまった。

早速、予稿集に乗せるタイトルと要旨が必要とのことで、長年調査・研究している大名の点取俳諧と、前任校でも多少講義やゼミで実践し、現任校へ来てから本格的に取り組みはじめた連句演習とを結び付け、江戸時代と現代の大学生の「連句の風景」を紹介することにした。

常々、連句には日本文学や日本語の粋が凝集された要素が多く、日本語や日本文学学修のかっこうの教材だと思っていた。外国人にとってもそれは同じことだろう。

連句はことばをつなぐだけでなく、時に人と人とをつなぐことがある。連句人である猫蓑会の会員諸氏はよくご存じのことと思う。連句にいただいたご縁、ということを強調したくて、いささか長い前置きになった。

さて、このシンポジウムは、延辺大学の外国語学院が主催し、朝鮮族研究学会（日本）と韓国日語日文学会（韓国）が共催する隔年開催の国際大会である。言語・文化・文学・歴史・経済など多様な視点で、中国・日本・朝鮮・韓国の学術的な比較研究を行い、学術文化交流を促進するためのものだ。

延辺大学は延吉市にある。延吉は、延辺朝鮮族自治州の人民政府の所在地である。中国本土の北東に位置し、南西部には長白山（朝鮮名・白頭山）が聳え、山頂には天池と呼ばれるコバルトブルーのカルデラ湖が広がる。この山を水源とする図們川（トゥーメンガン）（朝鮮名・豆満江（トゥーマンガン））は北朝鮮との国境である。ウラジオストクに近い立地で、古くは高句麗、渤海に属し、十九世紀には朝鮮族の移民が大量に移住、中華人民共和国成立後、延辺朝鮮族自治区が設けられ、現在の自治州となっている。

延吉市は人口五十万人の中核都市だ。人々は中国語と朝鮮語のバイリンガルで、街中の看板もメニューも簡体字とハングル併記。料理も中華料理と朝鮮料理のコラボレーション。会場の休憩室には朝鮮風だという餅菓子がとりどりに並べられていた。レセプションでは、朝鮮の民謡と舞踊が披露され、韓国の研究者たちの中には「同じひとつの民族なのに……」と涙ぐむ人もいた。

朝鮮族は二つの国に分断されたと思っていたが、延吉に行ってみて自分の不明を恥ずかしく思った。二つではなく三つに分断されていることが良く分かった。北朝鮮と韓国、そして中国の朝鮮族自治省。延吉は大戦中の抗日運動の拠点でもあり、抗日文学の歴史があることも、初日の基調講演ではじめて知った。空港から延辺大学へ行く途中に渡った踏切の線路は、後藤新平が総裁を務めた満州鉄道のものだという。

シンポジウム初日、午前中に三本の基調講演が行われた。わたしに声をかけてくださった修先生も「中国日本語学科教育の転換――教育と研究への影響」という演題でお話しされた。「日本語を学ぶ時代は終わり、日本語で日本文化や日本文学を学ぶ時代へと大きく舵を切る」という国家政策に関するものだった。現在、修先生は、教育庁が主導する中国国内の日本語教育の国家標準化事業にかかわっておられるという。二〇一一年からの約十年間に中国国内五百十二

大学で、二十四万人の学生が日本語を習得し、毎年六万人の卒業生を輩出、そのうち三万人が日系政府機関に就職してきたそうだ。

しかし、日本語教育の黄金時代は過ぎ去ったとのこと。現在、マレーシア語、スワヒリ語、フィンランド語の習得が盛んになってきており、近時、五つの大学の日本学科が閉鎖されたとか。そこで、日本語教育の質保証を担保すべく、二〇二〇年から全国の大学で、日本文学や日本文化を学ぶことに力点を置く日本語教育統一シラバスが実践される運びとなったという。修先生は、世界の中の中国と日本を語ることのできる、全人的な人間教育の重要性を力説された。政治経済社会に関するものだと思っていた中国の一帯一路政策が、言語文化にも及んでいることを知り驚いた。そして、中国という国の大きさを垣間見た気がした。

図們川にかかる鉄橋ごしに対岸の北朝鮮を望む

ところで、韓国と北朝鮮を隔てる板門店は日本人によく知られた場所であるが、北朝鮮と中国の国境はそれほど知られてはいないのではないだろうか。

大会初日、午前中の基調講演のあと、昼食のお弁当を食べ終わったところで、突然、修先生が、シンポジウムのオーガナイザーである全永男（チョンヨンナン）先生に、「平林先生はあしたお帰りになる。せっかくだからこれから国境にご案内したらどうか」と声をかけてくださった。予定外の単独行動はご迷惑だから、と丁重にご辞退申し上げたが、全先生も、「そうですね、それがいいですね、四時間あれば往復できるから、すぐですよ。夕方のレセプションに間に合いますね。ちょっと待ってください」と、ササッと微博（ウェイボ）（中国版LINE）で学生を呼び出した。

すぐに三重大学への留学経験のある延辺大学の三年生・南渓（ナンシー）さんがやってきた。彼女が、タクシーと高鉄（中国版新幹線）と路線バスを乗り継いで国境まで連れて行ってくれることになった。

吉林市出身の南渓は、高校生の時にお父様の車で一度国境に行ったことがあるが、公共交通機関で行くのは初めてだという。中国人も国鉄に乗るには身分証が必要とのこと（外国人はパスポートが必須）で、一旦、全先生の車で寮に南渓の身分証を取りに行き、広いキャンパスの門まで送ってもらい、われわれはタクシーをつかまえて高鉄の延吉西駅へ。全先生は大会運営の総指揮官なので、そのままシンポジウム会場へとって返した。修先生が全先生に声をかけてから、国境の図們川沿岸へのパーソナルツアーに出発するまで、わずか三十分ほどだった。

日本の新幹線にそっくりの高鉄で、延吉西駅の次が図們北駅。乗車時間は十五分、運賃は日本円で百七十円。駅から国境までは路線バスで二十分。南渓は、高鉄でもバスのなかでもスマホを駆使したり、見ず知らずの隣の席の人に話しかけたりしながら、どんどん情報を収集していく。行く先々であっという間に誰とでも仲良くなり、時には微博のＩＤを交換している。いつの間にか、南渓とわたしの二人だけのパーソナルツアーは、七、八人の国境訪問日中混合ツアーになっていた。

あいにくの曇天で、川幅の広い図們川は鈍色にうねっていた。満州鉄道の鉄橋が向こう岸とこちら側をつないでいる。鉄橋の真ん中が国境なのだという。鉄橋の下の滔々とした流れとは裏腹に、鉄橋の上の時間は止まっていた。

中国人の観光客が、にこにこと声をかけてきた。南渓の通訳によると「北朝鮮側の鉄橋と中国側の鉄橋では色が違う。あっち側はお金がないから手入れが行き届いてない」とのこと。向こう岸には、おそらく見せるためのハリボテと思われる集合住宅がしらじらしく並んでいた。双眼鏡を持っている見知らぬおじさんに、南渓が「それ、貸して」と声をかけ、私に渡してく

見知らぬおじさんに借りてのぞいた双眼鏡

れる。のぞくと金正日と金正恩の大きな写真が壁に掲げられているのが見える。抗日運動の記念碑や、ハングルで書かれた朝鮮民謡の碑が胸を打った。

二つの民族と言語が共存する国境の街、延吉（イエンジー）。大陸的なおおらかさ、開かれたコミュニケーション、会話や行動の当意即妙な即興性。連句を巻いているときのように自由で変化に富んだ、密度の濃い二泊三日だった。

中国人の接待文化、おもてなしの習慣は日本人の比ではない、ということを仄聞していたが、それは聞きしに勝るものだった。延吉の空港に着いてから帰国するまで、一から十まで延辺（イエンビエン）大学の先生方や学生さんにお世話になり、何の不安もなく、一円のお金も使うことなく、二泊三日の旅程を終えた。私の拙い話も、おかげさまで大変好評だった。いつか、延辺大学の学生たちと連句ワークショップを開くことができればと夢想している。

南溪と筆者（右）

第百五十二回猫蓑会例会
令和二年初懐紙　歌仙1～3

春（しゅん）の座

歌仙「冬牡丹」　　**坂本孝子　捌**

重ねゆく齢いそがず冬牡丹　孝子
ふくら雀のよく動く首　尚子
読み聞かせお伽噺のきりもなし　敦子
やかんのお湯を少し冷まして　文伸
月の出に雲去り四囲の山高く　忠史
移民家族の植ゑる馬鈴薯　尚
中華街想ふ故郷もうそ寒に　伸
旅行く僧の連れる妖怪　史
前髪の隠す片目が誘ふなり　敦
だからと言つてだつてそんなの　尚
蝉の声岩に染み込む訳ぢやなし　史
ヨットは沖へ水脈を曳く月　伸
W杯三回戦は突破して　敦
平和の鐘に涙拭ふか　孝
街角のアコーディオンにコイン投げ　尚
缶珈琲をほつと一息　伸
撮り鉄の群るる堤に花吹雪　敦
遠く聞こゆる春の雷　史
復活祭（ナオ）上着の裏のペイズリー　尚
箱に入つて消えた容疑者　孝
黒が白しろが汚れた世の中に　伸
般若の面折紙で折る　史
口下手で情が深くてゴンザレス　尚
美女を包んで贈る絨毯　史
酒池肉林極め尽して地獄まで　仝
得票率も金次第なり　敦
端正に腹筋を割る呼吸法　尚
踏めばきゆつきゆと浜砂の鳴く　史
チェシャ猫の現れさうな月の下　尚
実ざくろ笑ふ塀の落書　伸
口笛（ナウ）に秋を愁ひし少年期　仝
復元を待つ首里城の夢　史
つらつらと鍾乳石は垂れ下がり　尚
見出し大きく届く夕刊　敦
花爛漫団十郎のひと睨み　孝
駄菓子抓めば一座うららか　敦

連衆　宮川尚子　武井敦子　若林文伸
根津忠史

令和二年一月二十六日
アルカディア市ヶ谷

令の座

歌仙「児らの夢」　武井雅子　捌

年たつや五輪に描く児らの夢　雅子
メトロポリスの空に初鳩　健
囲の間薄紅梅の香りきて　泉子
小鉢に添へる木の芽田楽　美智子
月昇る頃まで飽きず磯遊び　酔山
品数多き街のコンビニ　通斉
ウ カンバスに仕上げ見事な曲線美　健
黒髪揺らし耐へる悔しさ　山
ねえあんたけもの道まで一緒だよ　泉
泉の辺り仰ぐ菩提樹　智
あめんぼは憂ひも何も無きがごと　斉
サンバ踊ればみんな仲良し　泉
九ちやんを思い出させるあばた月　健
秋刀魚の煙払ふ両の手　斉
越後より便り代はりの新走　山
水引かかる小さき桐箱　智
花の旅御朱印帳を携へて　斉
耕人の影畦にひねもす　健
ナオ 囀の窓に古文書読みあはせ　山
あいつも俺も源氏ご先祖　仝
濁流の那須の吊り橋渡りきり　智
芸能界は食ひつ食はれつ　斉
冬の檻眠れる獅子の大顎　泉
火宅の人に滾る雑炊　智
マシンガン打つよに好きよ好き好きと　健
再々婚は金が目当てよ　雅
腰痛を暫し忘れて地唄舞　山
座敷童と遊ぶ縁側　斉
まあこんな満月誰と見ませうか　泉
神の島には瞳澄む鹿　智
ナウ お造りの注文まづはこはだから　山
自由奔放孫とジジババ　斉
新曲の入手は既にネットにて　泉
中堅企業株を上場　智
吉祥の文様散らす花衣　雅
蝶追ひかける山間の谷　智

連衆　由井　健　青木泉子　聖成美智子
吉田酔山　菅原通斉

和の座

歌仙「やせ我慢」　林　転石　捌

やせ我慢何を踏ん張り咳払ひ　転石
登頂隊のすがる氷壁　秀夫
AIの研究さらに進みゐて　壽子
文房具屋をめぐるのが好き　有子
画学生スケッチをする月丸く　功
野づら茗荷の花盛りなり　路子
ウ 赤い羽根少女の笑みにはづむ寄付　夫
ファッションショーのポーズ悩殺　壽
お化粧の変はり目男変はり目に　夫
体重の半ば別人のもの　功
こつそりとほまち商ひする余禄　壽
家訓はでんと扁額の中　有
パラソルは仕舞ひ忘られ弦の月　夫
バナナパフェ出す子ども食堂　功
お隣に育児放棄が隠れてる　路
ひつくり返る靴の片方　壽
花浴びて大道芸のジャグリング　有
やすらひ祭あぶり餅買ふ　夫
ナオ 故郷の春は記憶の別次元　路
あの頃の僕あの頃の君　有
突然に石段のすみ穴が開き　壽
山椒魚はあわてふためく　功
かど番の大関となる名古屋場所　夫
脱温暖化まつたなしなり　功
あらたふと護摩の修法も金が要る　夫
放蕩息子マニ車押す　路
堪へかねる恋の痛みを胸の内　仝
男女の嘘を酒が見てゐる　夫
月の下身ぶるひをするしづり雪　壽
こんな夜には私灰猫　有
ナウ 陰陽師吉と凶とを残す家記　路
学びの校舎今もそのまま　壽
チコちやんに叱られるのをうれしがり　功
けつこういける喜寿のパプリカ　有
この橋の先にまだまだ花の波　石
ぱあを出したらやどかりはちよき　功

連衆　田中秀夫　杉山壽子　佐々木有子
松本　功　倉本路子

第百五十二回猫蓑会例会
令和二年初懐紙　歌仙4～7

梅(ばい)の座

歌仙「初笑」　内田遊眠　捌

諸共に詠む愉しさや初笑　遊眠
　床にはどんと飾海老あり　未悠
まつすぐな道の先には山見えて　霞
　三々五々と通学の子等　良子
透きとほるトップテナーを聴く良夜　誓
　風炉の名残の碗を整へ　肇
ウ　村長の胸に映えたる赤い羽根　良
　見合写真のメイクナチュラル　肇
受付はアンドロイドのお出迎へ　霞
　錬金術師媚薬取りだし　誓
淵深く白衣の医師に抱かれて　良
　天使寿ぐ愛に夏月　肇
敦煌にすいと飛び行く岩燕　良
　本当はどう米中の裏　悠
逃亡犯映画にすると息巻いて　誓
　ひさかたぶりに浸かるバスタブ　肇
親方に四股名賜る花の庭　良
　鬣長く駈ける若駒　肇
ナオ　遍路宿スニーカー脱ぎ飲む珈琲　悠
　丘のバス停スマホ忘れて　誓
おむすびがころり転げて穴の中　悠
　何もしないで出世する奴　肇
盗み見る我が宿六の日記帳　良
けふの滋養に寒卵二個　誓
マドンナとガラス戸越しの凍るキス　仝
　想像妊娠繰り返しつつ　良
長寿社会少子化社会ままならず　霞
　からんころんと妖怪が来る　良
月明し秋刀魚焼きゐる割烹着　霞
　回し飲みする今年酒とて　良
ナウ　蒐集の腰に根付の根も爽涼　悠
　本屋理髪屋なべて閉店　誓
石ひとつ由緒正しき神社跡　肇
　宝箱には夢がいつぱい　霞
花便りリレーで流すラジオ局　眠
　衛星光る春の曙　執筆

連衆　棚町未悠　高塚　霞　本屋良子
　丹下　誓　宇田川肇

鏡(きやう)の座

歌仙「雨の匂ひ」　永田吉文　捌

改札に雨の匂ひの淑気かな　吉文
　春着の裾を少し引き上ぐ　富子
七並べカードシャッフル鮮やかに　待雪
　ネイルサロンは今日も満員　暁巳
月淡く遠く聞こゆる汽車の音　徹心
　牡蒿(をとこよもぎ)の風に揺られて　一枝
ウ　ジョギングは稲架に沿ひたる田舎道　富
　小学校で国旗掲揚　心
失神は貴方が側にゐたからね　枝
窓の外にはライバルの影　巳
琵琶演奏拍手の止まぬコンサート　富
　平安の夢ぬらす涙よ　雪
削氷(けづりひ)に月の滴の降るやうな　枝
　かなぶん過る鳥籠の前　富
お喋りの間にケータイ鳴りだして　雪
　如意輪観音開帳を見に　仝
花盛り名代茶店の人の列　巳
　紋白蝶を追つて父と子　心
ナオ　新調の長靴嬉し春の川　枝
　机のメモのチェック忘れて　富
AIがドローン来たとご注進　雪
　鼻こするのは詐欺のし始め　心
冬眠を忘れた熊に町で遇ふ　富
　兄弟舟に鰤起し鳴り　心
ほろ酔ひの憶良貧窮問答歌　雪
　採点困難今の美意識　巳
契り終へ頬赤らめて笑ひたる　心
　スマホメールにハートしかない　仝
マシュマロの月ふんはりと丘の上　雪
　時代祭に刀負ふ子等　吉
ナウ　紅葉かつ散る活動に見入りつつ　雪
　魔法瓶より注ぐ焙じ茶　富
履歴書に数多並んだ受賞歴　巳
　銀座の夜は宵の口なり　心
花簪粋な姿の影引きて　吉
　バスケット提げ二人野遊び　執筆

連衆　名古屋富子　松島待雪　島村暁巳
　佐藤徹心　西田一枝

蘭（らん）の座

歌仙「木守の」　御園魚彦　捌

木守の夕陽に明きいのちかな　魚彦
　凍雀の寄り添へる軒　葵
世界遺産ジグソーピース当て嵌めて　千惠子
　皺少し増え唄ふシャンソン　美奈子
単線の各駅停車望の月　ふみ
　茸の里のもてなしを受く　秀樹
ウ
今年酒講釈まじへ注ぎまはる　奈
　品定めする雨の降る日は　千
好きな子の名前言つたら同じ子　仝
　オレンジ色にマニキュアを替へ　葵
干拓のすすんで海は遠くなる　み
　国立公園あれこれの禁　樹
繊き月キャンプファイアの上に見て　千
　色鮮やかに茄子漬けたり　奈
夫婦して気圧の谷を予測する　樹
　整形外科は矢印の先　葵
坂道を登れば社花三分　樹
　かたびら雪の肩にうつすら　み
ナオ
おいらくのふらここ揺する革命家　奈
　カラシニコフは抽斗の奥　葵
新発意の庭掃く音のすがすがし　み
　まだ捨てきれぬもののあるなり　仝
狐面かぶれば女体妖しげに　葵
刺されてみたい冬薔薇の棘　千
埋火の想ひはじけて結ばるる　奈
　ふらんすちりめん朝風の中　葵
集ひゐてラジオ体操残る月　奈
　宿題やれとちつち蝉聞く　千
摂待の蕎麦饅頭の蒸し上がり　葵
　大学講師辞めて小あくび　樹
ナウ
松すぎて故郷からの友の文　奈
　どんど焼には藁が足りない　彦
垣抜けて猫のしつぽが消えてゆく　み
　アリスの国でトランプをする　千
花吹雪平和の鐘を打ち鳴らせ　葵
　気候温暖はじまりの春　樹

連衆　石川　葵　鈴木千惠子　鈴木美奈子
　中村ふみ　青木秀樹

珮（はい）の座

歌仙「春隣」　荒木　鑑　捌

外濠にたゆたふ水や春隣　鑑
　日脚の伸びて鷺の抜き足　あき子
バレリーナグランフッテの切りもなし　香織
　誘ひ合はせてさぼる友達　純子
弓張のひよいと梢に懸かり来る　鄭和
　風冷やかに羽織る一枚　ひろみ
ウ
今年酒呷るスピード速まりて　和
　工事現場におかつぱの女子　織
肩寄せて飛行船だと指をさす　み
想像だけのリング交換　純
保護犬を貰ひ育てて時流れ　み
　富士の夕焼け月浮かぶ湖　あ
雑貨屋の蚊取線香あちこちに　織
　切らずに揚げるちくわてんぷら　み
通勤の電車で昭和歌謡聴く　織
　カタカナ文字のほやほやの駅　和
欄干に人行き交へり花筏　純
　壬生狂言に青い目の客　織
ナオ
陽のかけらついばむ雀うららけし　あ
　アイスクリームちよつと冷たい　和
百メートル九秒台の夢を追ふ　み
　新型肺炎蔓延を阻止　織
体温の高まるままに好きになり　和
　いつのまにかに帯はほどけて　あ
雪女腕の稚の父は誰　鑑
　氷魚の使ひも手遅れとなる　純
旅にありメールＦＡＸだめなのよ　和
　出掛けに捜す財布ケータイ　織
白髪の胡弓奏でる月の窓　仝
　木の実降る道共に下りて　純
ナウ
裏口の門のそばかまどうま　あ
　父の遺愛のファーブルを読む　和
近眼と乱視の眼鏡二つ持ち　み
　大僧正のつまむ炒り豆　和
みはるかす原はあまねく花盛り　鑑
　黒々延びる耕しの畝　執筆

連衆　岩崎あき子　平林香織　近藤純子
　高山鄭和　江津ひろみ

第百五十一回猫蓑会例会
令和元年明雅忌　脇起源心1～5

新大橋の座

脇起源心「お福が笑ふ」　青木秀樹　捌

人形やきお福が笑ふ夷切れ　明雅仏
女の客はとても爽やか　秀樹
十三夜無双窓より望みゐて　雅子
お行儀のよく座る黒猫　吉文
ウ　冬至湯は父が最初と決りなり　敦子
ラグビー実況送る声援　霞
止り木の隅でいつものスコッチを　肇
今日の依頼者わけが解らず　仝
胃袋をとにかく満たす奴が好き　雅
X線で示す潔白　霞
北の国またもミサイル飛んでくる　文
停電いまだ直せないまま　雅
後輩と交はす敬礼花万朶　肇
肩のモールのうららかな朝　霞
ナオ　街中にひとり慎む受難節　肇
砂金を探し進む幌馬車　霞
ノーベル賞村上春樹また逃し　文
尊皇思想語り継がれる　肇
ぬばたまの闇さまよひて君を追ふ　霞
ベアトリーチェと天界の愛　肇
セレナーデ鍵盤走る細き指　雅
出口の見えぬ難問に遇ひ　樹
月涼し孤高の彼の乱れ衣　敦
本性隠すサングラスなど　文
ナウ　ご先祖も長寿でしたとご住職　樹
懸垂できた子らはにぎやか　敦
花の衆集へる声に手を振りて　文
蝌蚪動き出す築山の蔭　霞

連衆　武井雅子　永田吉文　武井敦子
高塚　霞　宇田川肇

八名川の座

脇起源心「七部集」　島村暁巳　捌

秋灯恋さまざまの七部集　明雅仏
髪梳きをればいざよへる月　暁巳
蘆刈女笠を目深に通ふらん　健
橋のたもとに県境の札　美奈子
ウ　神迎へ勧進元へ名乗り上げ　忠史
電気加湿器皆で試して　富子
孫娘継いだ団子屋長い列　俊子
何とかしてよ開かぬ踏切　史
どの国もカタストロフに明け暮れぬ　奈
砂漠の果に笛吹くは誰　史
旅僧は西夏の文字を読み解きて　俊
青き眉上げ北の駅頭　奈
御成待つ本陣の門花篝　史
鶏の蹴合ひもノーサイドなり　仝
ナオ　耕牛と歩めば柔し畑の土　俊
腰を伸ばして仰ぐ遠山　史
肴よし二合半の酒酌み交す　奈
扉の外は雪女らし　史
彼の人はひげとステッキ似合ふ奴　仝
頬すりよせてねだる口づけ　富
駐在所僕と犬とが駆け込んで　巳
高速道路ドローン旋回　俊
噴水の月は三角四角にも　健
幼子の追ふ蜥蜴ちよろちよろ　俊
ナウ　じゃんけんぽいあっちむいてほいとチョキを出し　健
AIだつて予想できない　奈
研究所上棟なりて花万朶　巳
丘のかなたに初虹を見る　健

連衆　由井　健　鈴木美奈子　根津忠史
名古屋富子　三木俊子

芭蕉稲荷の座

脇起源心「虚実皮膜」　長坂節子　捌

味はひは虚実皮膜の新酒かな　明雅仏
月光ゲほのと映る盃　節子
ツーリング山の錦を縫ひゆきて　孝子
イヤホンで聴くヒットメドレー　遊眠
ウ　冬りんごそつと差し出す括り袖　転石
寒さしのぎに抱いてゐる猫　泉子
火遊びは明眸皓歯の罠に落ち　通斉
チームワークで泥掻きをする　孝
おやこんなところに奇貨があらはれて　石
神の御稜威に民はひれ伏し　孝
名人のツボが操る世話噺　仝
越後の頃の事がなつかし　石
振り返る棚田すつぽり花の中　斉
亀鳴く池に日ざしやはらか　泉

ナオ 遠霞五重の塔のうつすらと　眠
破戒の愉悦隠す変装　孝
嬰抱いてひそかに出る裏の木戸　石
優しかつたわ鬚のラガーは　斉
幸せはボーッと生きちやあ掴めねえ　眠
無垢な少女の盗む鉛筆　泉
燐寸売る北のはづれの港町　石
自動小銃襷がけして　孝
夏の果玉兎のはねて子の夢に　泉
エンゼルフィッシュひらりひらりと　眠
ナウ 嫌ひです歯医者の廻すグラインダー　孝
破つて捨てた選挙公報　泉
花便り届きてよりの気もそぞろ　節
友ともぎとる春の椎茸　斉

連衆　坂本孝子　内田遊眠　林　転石
青木泉子　菅原通斉

萬年橋の座

脇起源心「ちちろ啼く」　山田美代子　捌

喉走る酒が命やちちろ啼く　明雅仏
名残の月の照らす大皿　美代子
窓の外芭蕉は葉裏返すらん　良子
きのふもけふも何事もせず　路子
ウ 着ぶくれて亭主いそいそ渋谷まで　酔山
宿の入口隠す冬蔦　有子
小さめのふたつ枕に夜は明け　英雄
アールグレイでモーニングティー　香里
第四次産業革命進みゐる　路

人工知能家政婦が来て　山
しらうとは登るに難きいろは坂　良
野性の猿が盗む弁当　有
花枝垂地に着く程に神々し　仝
朧の中に箏の音を聞く　山
ナオ 国文科和泉式部忌修しをり　良
季寄せ鞄に遠出する父　英
台湾のイベントどこもジャパニーズ　里
雪景色見にスキー場へと　路
あの男なんでもてるか謎のまま　有
つひに五度目の花嫁となり　英
名優の演技にブルーリボン賞　良
自家用ジェットで北へ南へ　山
月連れて海亀と行く竜宮城　良
御手洗団子孫におみやげ　山
ナウ 兄太郎弟三郎僕次郎　有
剣道柔道県の代表　山
桜咲くネット確認起きてすぐ　里
ふはりふはりとシャボン玉飛ぶ　英

連衆　本屋良子　倉本路子　吉田酔山
佐々木有子　鈴木英雄　式田香里

常盤の座

脇起源心「糸瓜かな」　鈴木千惠子　捌

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな　明雅仏
裏彩色のごとき明月　千惠子
幽人枕仮寝の脇に引き付けて　了斎
重たい猫をえいと投げ出す　よう子

ウ 万歳のやうな残心合気道　たけを
ノーベル賞は羽織袴で　正夫
トンネルを抜け峡谷の広やかに　あき子
雪焼けの顔浸かる温泉　夫
都会では恋の魔法がすぐ解ける　斎
携帯履歴代々の彼　を
トリセツに収まりきらぬ女です　う
色即是空唱へ合掌　を
こんこんと水の満ちくる飛花落花　あ
低く春泥高く春嶺　斎
ナオ 遠足の列の時折途切れつつ　仝
仲間はづれもパワハラもなく　う
笛鳴つて試合終はればノーサイド　夫
町は静まり杜に鼲鼠（むささび）　あ
藁人形懐に抱き石段を　斎
三百六十五日いつしよに　を
手をつなぎキスも交へて秋遍路　斎
つかず離れず赤とんぼ来る　夫
大きくて大きくてあの頃の月　を
坂東太郎濁流の夏　あ
ナウ どこにでも出現スーパーボランティア　う
おにぎりよりもおむすびと呼ぶ　斎
注連をゆふ枝垂大樹の花盛り　千
里の夕べに霞棚引く　あ

連衆　鈴木了斎　秋山よう子　山中たけを
國司正夫　岩崎あき子

第百五十一回猫蓑会例会
令和元年明雅忌　脇起源心6～7

森下の座

脇起源心「秋の風」　松島待雪　捌

物言はぬ像の翁や秋の風　明雅仏
　塵なき庭に黄菊白菊　待雪
カルテット月へ届けと響かせて　ひろみ
　苦手の九九が頭巡りぬ　洋子
ウ　菰僧の寒さうに立つ門の先　敏枝
　鯛焼抱へ通り過ぎる子　純子
紅さして親もうつとりする美貌　徹心
　キスだけのはずすぐにうやむや　心
ギヤマンの壺に入れたる惚れ薬　洋
　錬金術師化学者となり　み
拾ひ猫いつしか家の主顔　枝
　粋な黒塀丸いアンテナ　心
花一番南の島の揃ひ踏み　洋
　めかぶとろろで保つ健康　み
ナオ　青年は蚕飼の家名受け継ぎて　枝
　コンクリートへ代はる吊橋　洋
大伴旅人の和歌を諳んじる　純
　暖炉の棚に封書さらりと　枝
警察の初動捜査にミスがあり　み
　昔相棒今恋敵　心
僕にだけ二回目くばせする女将　仝
　足音聞けば浮かびくる鯉　み
路地裏に予定決まらぬ月涼し　純
　金毘羅歌舞伎幟ひらひら　洋
ナウ　盤上の星の導く一手こそ　純
　静寂を突きて雉の高声　心
杯重ね重ぬるほどに花吹雪　枝
　春は爛漫古都夢の如　み

連衆　江津ひろみ　大島洋子　箭内敏枝
　近藤純子　佐藤徹心

清洲橋の座

脇起源心「芭蕉稲荷」　髙山鄭和　捌

秋しぐれ芭蕉稲荷は御縁日　明雅仏
　三々五々に月のうそ寒　鄭和
美術展新規の画材模索して　香織
　自転車かつぎ昇る石段　一枝
ウ　大人たち大なはとびに夢中です　未悠
　郷土史講座最前列で　美智子
わからないふりしておでこくつつける　織
　微熱のうちに消えし初恋　枝
休肝と無理矢理酒をなぜやめた　智
　はがれかけてる駅のポスター　織
岩木山寄りそつてゐる峰三つ　仝
　本家惣領遁走の由　枝
聴こえくるショパンのワルツ花の窓　悠
　空に届けと鞦韆を漕ぐ　織
ナオ　赤潮が出たぞと村はおほさわぎ　仝
　粥を啜れるシャーマンの母　枝
天蓋の玉座見上ぐる貴賓客　織
　伯爵邸に狸うろうろ　悠
雑念を洗ひ清めてボランティア　智

令和元年十月二十四日
江東区芭蕉記念館

あなたと食べる鳥兜掘る　仝
今やもう嫦娥の息もかすかにて　枝
　寝乱れの髪梳けば溢れ蚊　織
セリーヌでビキニデザインあれこれと　仝
　船長室の漫画本棚　智
ナウ　電線に烏はずらり同じ向き　織
　与党連合安泰と聞く　枝
花大樹五十年目のクラス会　智
　高原列車遠足の子等　悠

連衆　平林香織　西田一枝　棚町未悠
　聖城美智子

正式俳諧興行

十月の猫蓑会例会では、はじめに俳諧芭蕉忌興行として、芭蕉発句脇起による正式俳諧を挙行、続く実作会では、東明雅師追善興行として、各座に分かれ、明雅師考案による源心を巻きます。以上の源心七巻はその記録、左ページは正式俳諧の記録です。

配硯が宗匠、来賓などに硯を配る

令和元年　俳諧芭蕉忌　正式俳諧

俳諧連歌脇起二十韻

笠は長途の雨にほころび　帋衣はとまり
とまりのあらしにもめたり　侘つくした
るわび人　我さへあはれにおぼえける　む
かし狂歌の才士　此国にたどりし事を　不
図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　翁

越冬燕ぢつと動かず　秀樹
焙烙の豆を煎る音軽やかに　転石
胡座の中は嬰の定席　路子
ウ
月いくつおとぎ話の国に出る　千惠子
弓の名手のくれた猿酒　了斎
牧閉ざす心に秘める人のゐて　暁巳
慰め役が掴む幸運　孝子
良く当たる神社の籤に長き列　吉文
商店街の書店消えたり　美代子
ナオ
台湾の寄付で復興成し遂げん　香織
スネアドラムの刻む二拍子　美友紀
かき氷おでこの痛み懐かしく　忠史
蚊に逢引を邪魔される月　徹心
歳の差婚妻の猫にも嫉妬する　雅子
ヨガ教室の募集ポスター　敦子
ナウ
歩道橋渡ればすぐに停留所　鄭和
欠伸次々のどらかな午後　塁
花の雲大仏の見る夢はるか　良子
古都の名物菜飯さみどり　執筆

令和元年十月二十四日　首尾
江東区芭蕉記念館に於て興行

正式俳諧配役

宗匠	一紅庵良子
脇宗匠	林　転石
副宗匠	鈴木千惠子
執筆	大島　洋子
知司	根津　忠史
副知司	佐藤　徹心
座見	武井　敦子
座配	髙山　鄭和
花司	永田　吉文
香元	平林　香織
配硯	松島　待雪
仝	竹中　塁
老長	青木　秀樹

宗匠が花の句を詠む。右は宗匠、左は執筆

正式俳諧興行終了後、配役全員で、明雅師の遺影を囲み記念撮影

花司が花を活け、芭蕉像に供える

第二十二回（平成三十年）
えひめ俳口全国連句大会入賞歌仙六巻

愛媛県教育長賞

歌仙「白服の」　奥野美友紀　捌

白服の丈も短くなりにけり　美友紀
　青葉の風の吹入れる部屋　郁子
ジェット機は山稜めざし飛び立ちて　秀樹
　ペットボトルのお茶を飲み干す　文伸
たもとほる池の水面に月の影　雅子
　声は遥かに菱取りの舟　転石
ウ 秋の宿討論会の盛り上り　雅
　迷つた時は小首かしげる　石
けふもまた犬の散歩で出会ふ君　樹
　ミスキャンパスを競ひたるとか　仝
　CAもアナウンサーも狭き門　雅
　教会の鐘遠く優しく　郁
純米酒好みは兄と同じにて　伸
　おでんけとばし鍋囲む月　仝
腹筋は三百回を日課とす　紀
　低処高思と額の四文字　伸
誘ひ合ひ京の名刹花盛り　郁
　甘味いかがとうららかな午後　雅
ナオ 告天子疲れも知らで歌ふらん　伸
　急降下する与党支持率　雅
ほねつぎが副木の寸をはかりかね　石
　こんなところにアフリカの人　雅
深視力前後感覚優れたる　伸
　鰻と穴子味の違ひは　石
ぬめぬめとぬるぬるとするきもだめし　雅
　逃げ足速しランナーの彼　伸
結婚は切札になどなりません　紀
　鼓を打つてつける序破急　雅
月渡る着背長重き木曽殿に　石
　信州名物これが蜂の仔　雅
ナウ 海嬴廻し近頃とみに進化して　伸
　発掘すれば石器いろいろ　石
赤道上衛星軌道狂ひなく　樹
　世のため天寿全うの医師　雅
花明り留守番の子に置き手紙　紀
　広き公園揺れるぶらんこ　執筆

連衆　東　郁子　青木秀樹　若林文伸　武井雅子
　林　転石

平成二十九年七月十九日首尾・江東区芭蕉記念館

松山市教育長賞

歌仙「秋寂ぶ」　荒木　鑑　捌

秋寂ぶやひときは高き子らの声　鑑
　山の端を染め出づる夕月　郁子
土瓶蒸し快き香を楽しみて　雅子
　会社帰りの仲間三人　太郎
減量を競ひあつてのジム通ひ　一有
　浴衣するりとかまわぬの柄　太
ウ 金魚藻の鰭触るるたびゆらめける　雅
　誘ひ誘はれ仕合せな刻　郁
手をとりてあいまい宿の灯の下へ　有
　ハートマークを繰り返し書き　雅
標識は外国人にわかりよく　有
　讃美歌響く杜の教会　郁
ひとしきり降りし雪やみ青き月　太
　勧め合ひつつ名所の酒　郁
蘊蓄は聞いてゐるふり知らぬふり　雅
　棚に埃の熊楠の集　太
花大樹齢千年守り継ぐ　雅
　見上ぐる方に美しき初虹　郁
ナオ 望潮なにを招くや琴ヶ浜　太
　景気予測の資料改竄　有
夜も更けて魑魅魍魎の官庁街　太
　女難の相をありありと見る　雅
長き恋波乱含みの新所帯　有
　過ぎ来し方は夢と消えつつ　郁
建売に峰の松風吹き抜けて　太
　浅漬けのナス鮮やかな紺　雅
鈴本の出し物云々半可通　有
　ATMの操作手間取る　雅
雲払ひ端正の月中天に　有
　孫と見送る渡りゆく鳥　郁
ナウ 奥山の杣道鹿に出くはして　鑑
　うまくつき合ふ頭痛腰痛　雅
いつまでも唯我独尊三代目　有
　京の寺々今日も賑はひ　太
咲き盛る花も寿ぐ歌の宴　鑑
　枝から枝へ舞へる蝶々　執筆

連衆　東　郁子　武井雅子　功刀太郎　白石一有

平成二十八年十一月六日首尾・江東区芭蕉記念館

テレビ愛媛賞

歌仙「軟東風」　石川葵　捌

軟東風に地球儀くるり回しけり　葵
　電子メールの届く端月　あづさ
それぞれのこうなごの眼に海ありて　小奈生
　片側町の刻はゆるやか　葵
自転車のハンドル光る十三夜　あ
　かわりばんこに酸漿を吹く　奈
ウ　接待のほうじ茶嬉し秋遍路　葵
　庭の祠の謂れ説く僧　あ
新刊は愛についての覚書　奈
　ボーヴォワールとサルトルが好き　葵
キスをしたカルチェラタンのカフェの椅子　あ
　詐欺師の笑みは凍月の青　奈
大鍋にふつふつ煮える冬至鍋　葵
「むかーしむかしあったてんがの」＊　あ
弟は学芸会のこびとA　奈
　しっぽの先まで伸びるぶち猫　葵
花開く古木なれども匂やかに　あ
　温泉宿のうららピンポン　奈
ナオ　二合半の酒にほろ酔い春炬燵　葵
　世に言うところ石部金吉　奈
揺れている負けず嫌いの女の瞳　あ
　優しき雨に本音飲み込み　葵
不眠症職場にじわり蔓延中　奈
　元気印のチャバネゴキブリ　あ
十字きり祈るシスター夏深し　葵
　無人の町に銃弾の痕　奈
アルバイト募集のちらし舞い降りて　あ
　勇んで海を越える老頭児（ロートル）　奈
樟脳の残る背広に月白く　葵
　大菊花展までの路筋　あ
ナウ　そぞろ寒蕎麦打つひとの黙々と　葵
　通い始める胡弓教室　奈
形から入るタイプと指摘され　あ
　万能薬と記す薬袋　葵
吾が裔もアンドロイドも花の下　奈
　夢にほたほた笑う山々　あ

＊「昔々あったとさ」の意。新潟地方のお伽噺

連衆　清水あづさ　瀧村小奈生

平成二十九年七月二十七日満尾・文音

庚申庵倶楽部賞

歌仙「寒の水」　御園魚彦　捌

かはたれの寒の水汲む厨かな　魚彦
　窓を開ければ香る早梅　美智子
姉妹連弾の指軽やかに　香織
　薄きグラスの葡萄酒の揺れ　了斎
駅頭へぽつかり昇る望の月　通斉
　むくの塒に耳ふさぎ行く　斎
ウ　秋の寺寝転んで見る鳳凰図　織
　いつも隣に君がゐた頃　斎
イニシャルを刻む揃ひのペンダント　織
　監視カメラはみんな知つてる　通
読みかけの文庫を閉ぢて毛糸編む　智
凍月仰ぎ帰り来る爺　織
アルプスの少女ハイジは夢の中　仝
　白い仔山羊と遊ぶ坂道　斎
扉の内の黒人霊歌盛りあがり　通
　雲の上には何があるだろ　斎
すめらぎに深く礼する花衣　智
　つけつぱなしのテレビのどらか　織
ナオ　みちのくへお座敷列車春の旅　織
　仮設に通ふボランティア医師　仝
お返しのお返しをする義理堅さ　仝
　生物界の食ひつ食はれつ　彦
エイの腹見上げてはしやぐ夏休み　智
　この頃流行る女子のすててこ　織
蔵あさり出でしは閨の指南本　智
　ヨガするやうに抱き合つてみる　斎
等身大骨格模型しやらしやらと　智
　耳無し芳一孫に聞かせて　通
月消えた後の真闇をまさぐりぬ　斎
　敗戦の日の夜に点す灯　仝
ナウ　町内に芋の子汁をふるまひて　織
　やさしくゆらぐせせらぎの音　斎
外宮から内宮巡るお伊勢さん　織
　高い閾を思ひ切り飛ぶ　智
極まりて崩るる波頭花の散る　彦
　ちんちん電車つつむ糸遊　通

連衆　聖成美智子　平林香織　鈴木了斎
　菅原通斉

平成三十年一月十四日首尾

ホテルグランドヒル市ヶ谷

第二十二回（平成三十年）
えひめ俳口全国連句大会入賞歌仙（続き）

俳口賞

歌仙「藍涼し」　高塚霞　捌

運ばるる白磁に藍の涼しさよ　霞
　蛍遊ぶせせらぎの茶屋　遊眠
旅鞄地図にない道探りゐて　孝子
　ＡＩ駆使し伸ばす連勝　忠史
夕月夜一刷け残る茜雲　あき子
　刈田の中を帰る自転車　昭
ウ　ハロウィーン歩き疲れて続く黙　暁巳
　偶然だねとがつちりとハグ　孝
くやしいが手練の罠がうれしくて　巳
　三年寝太郎つひに目覚めた　眠
西之島領土拡大大噴火　史
　悴みながら連写する月　眠
馴鹿の肉を吊して冬を越し　孝
　ワンショットにて呷るウオツカ　仝
ＥＵと関税交渉ままならず　昭
　からからからと廻る地球儀　眠
花の寺巡礼札を有難く　史
　少し斜めに春のお帽子　あ
ナオ　出航の銅鑼にたゆたふ蜃気楼　孝
　ベストセラーの戦記もの買ふ　史
あしたから検査入院いたします　巳
　小さいうちに摘まむ悪の芽　孝
サングラス人には言へぬ夢かくし　あ
　いつ吸ひついた脛の山蛭　巳
豊満な乳房あづける閨のうち　孝
　職業欄にヒモと書かうか　史
きつちりと布巾をたたみ離縁状　あ
　庭の片隅蹲る犬　眠
静やかに明月昇る外厠　昭
　口数少な葦刈の衆　巳
ナウ　大盛の松茸飯を注文し　史
　高校野球部僕は補欠で　孝
　ＯＢ会秋田音頭でお開きに　眠
　新幹線のダイヤ順調　巳
揺り椅子に画集拡げる花の昼　霞
　うたた寝誘ふ風のやはらか　昭

連衆　内田遊眠　坂本孝子　根津忠史　岩崎あき子
　松原　昭　島村暁巳
平成二十九年七月二日首尾・江東区芭蕉記念館

俳口賞

歌仙「二十歳より」　倉本路子　捌

二十歳より戦後七十二度の夏　路子
　緑の深き弧状列島　了斎
グランドに人文字描く鮮やかに　転石
　何も言はずに口笛を吹く　千代子
心地よく独り酌むなり月見酒　有子
　谷間の村は竹を伐る頃　斎
ウ　勧進に世話役廻る御命講　石
　写真釣書懐にあり　斎
醤油顔よりも好きですソース顔　代
　着やせだつたと知つた嬉しさ　石
葬儀には謎の女がまたひとり　斎
　いつの間にやら消えた通帳　有
月出でてぴゆつと噴水高まりぬ　代
　黒揚羽追ふパリの細道　斎
突然に男の影は地に倒れ　石
　平家を語る低き琵琶の音　仝
事もなきひねもすを花散り急ぎ　斎
　勝ち負けつかぬけふの闘鶏　代
ナオ　春雷を聞いた気がする曇空　斎
　若禰宜さんはいつも小走り　代
読みやすく書かれし記譜を貰ひ来て　有
　鼠追ひ込む羽目板の穴　斎
リメイクの和服終ひはちやんちやんこ　路
　リゾット頼めばなんと雑炊　斎
礼儀とて女を見れば口説く奴　仝
　金の力にあらがへぬまま　石
その時は幸せだつたと思ひたし　斎
　棚の糸瓜のゆらり下がりぬ　代
月照らす猫駅長の制帽を　石
　夜汽車の煙臭ふ高西風　斎
ナウ　口髭に明治男の気概見る　有
　鑑定たのむ蔵のお宝　代
きれい好きウエットティッシュ持ち歩く　有
　ベルトの穴を一つ緩めて　石
花眉を踏めば地球の軟らかき　路
　イーゼルの立つうらかな丘　有

連衆　鈴木了斎　林　転石　山本千代子　佐々木有子
平成二十九年五月二十九日満尾・戸塚地域センター

第二十三回（平成三十一年）
えひめ俳口全国連句大会入賞歌仙三巻

松山市長賞

歌仙「大陸の記憶」　石川 葵　捌

大陸の記憶抱きて柳絮飛ぶ　葵
　驢馬の睫毛に風光る頃　孝子
麺麭職人発酵を待つのどろかに　葵
　ピッチャー交代告げる球審　孝
タクシーのフロントガラス月細く　葵
　二百二十日の天気図の渦　孝
ウ 医学書の積み置く上のかまどうま　葵
　ただ愛しさにさする足首　孝
町火消し粋でいなせで口べたで　葵
　植木鋏の音の清しき　孝
煩悩の犬を払つて墨を磨る　葵
　島の御陵の白南風の月　孝
民宿の干されたままの海水着　葵
　覚えがないと官僚はいふ　孝
誰にでも男時の裏に女時あり　葵
　序曲アレグロマノントロッポ　孝
銅鍋で煮詰めるジャムに花の雨　葵
　匂ひすみれを呉れたお隣　孝
ナオ 少年の納屋を覗ける抱卵期　孝
　帽子ねぢ込むうしろポケット　葵
交番の手配写真も古びたる　孝
　をんな幾人殺す流し目　葵
共枕雪はすべての音を消し　孝
紅鮮やかに寒椿散る　葵
誰が上げし五円十円石地蔵　孝
　秦氏の裔の住まふ内海　葵
故郷の訛優しく交はすらん　孝
　発車間近な銀河鉄道　葵
月光と夢の半券栞とし　孝
　一息で飲む苦い千振　葵
ナウ 芸術祭平成の秋をしみつつ　孝
　歪な壺を鑑定士褒め　葵
杖を曳くスクランブルの交差点　孝
　スマートフォンはマナーモードに　葵
繚乱の花にも酔へり酒家の客　孝
　初虹淡く描く仙人　執筆

連衆　坂本孝子
平成三十年五月十六日満尾・文音

テレビ愛媛賞

歌仙「庵は今」　荒木 鑑　捌

庵は今青む草木の息吹かな　鑑
　昔翁の旅立ちし東風　孝子
釣人に蝶のひらひら遊び来て　徹心
　くはへタバコで日がな一日　敦子
月の出に雲去り四囲の山高し　忠史
　秋収めなり唄は追分　孝
ウ 駅長さん棚の瓢箪自慢顔　史
　土偶の腰はどれも豊満　仝
好きと入れクロスワードの謎が解け　心
嫉妬の視線もゆるウオツカ　孝
南北は交じり合はずに渾沌と　敦
　温暖化より金が優先　心
こそ泥の忍ぶる月の明け易く　孝
　古い袷に継ぎ当てて着る　史
幽玄の面も萎ゆる能舞台　孝
　音を立てずに嚙る煎餅　心
花の下ボンネットバス走り去り　敦
　猫が留守番お遍路の宿　史
ナオ 遠足の揃ひの帽子くねくねと　敦
　訳の判らぬ天才の絵よ　孝
人生の味は余白か行間か　仝
　高齢者には還付金有り　敦
おーいお茶炬燵にポンと缶のお茶　心
　あいつは誰だ雪女かも　史
後朝のやがて消えゆくけもの道　孝
　厄除けに置く門の盛り塩　敦
地鎮祭力士の四股のたくましく　心
　皆で果さん復活の夢　史
新記録祝ふ笑顔に望の月　心
　文化の日には日の丸を揚げ　敦
ナウ 雁の列腹摺るやうに越ゆる峰　史
　親父蕎麦打つ汁にこだはり　孝
着替へにも靴を履くにも左から　史
　追試合格心晴々　心
雨降りて風荒びても散らぬ花　鑑
　自転車連ねうららかな土手　敦

連衆　坂本孝子　佐藤徹心　武井敦子　根津忠史
平成三十年三月四日首尾・江東区芭蕉記念館

第二十三回（平成三十一年）
えひめ俳口全国連句大会入賞歌仙（続き）

愛媛県連句連盟会長賞
歌仙「古地図」　　平林香織　捌

梅探る江戸の古地図に残る丘　清子
　誰を呼ぶのか寒鴉三声　香織
女子バレー策あれこれと練るならん　土筆
　テレビを叩く癖は直らず　たけを
月高く入海静か漁師町　織
　塾より帰る児らのやや寒　清
ウ　一匹の飛蝗宝と言ひ張りて　を
　曲芸団の来る鑁阿寺（ばんなじ）　筆
腹に巻く晒しに君の名を記し　清
　背中の刺青歪む相床　織
どぶ板をホップステップ駄菓子買ふ　筆
　炭酸水の泡のはじけて　を
退屈な銭亀夏の霜を浴び　清
　傷病兵の造る盆栽　織
曾祖父は露西亜生まれと嘯きぬ　を
　リキュールグラスそそぐバーボン　清
花の雲自慢の馬で弓放つ　筆
　黄金週間改元の沙汰　織
ナオ　遍路宿笑顔笑顔の旅行脚　筆
　ろくろつ首のダンスややこし　を
理非を問ふ老師の書状巻紙で　織
　命毛白し苞を開けば　清
雪を踏む音確かめる盲導犬　を
砂糖に漬ける文旦の皮　筆
ソネットに昔の愛の唄を詠み　清
　妻のピアノでバイオリン弾く　織
若者は宿も決めずに洋行し　筆
　医療保険に悩む米国　織
高層のビルの谷間の月の舟　を
　赤い羽根つけ母と歩きぬ　清
ナウ　掘り立ての里芋無人販売に　を
　破れぬ和紙に描く武者の絵　筆
登り窯口開けてゐる休業日　清
　終着駅でレンタカーする　筆
花夢幻社の杜の能舞台　織
　天の端までとどく風船　を

連衆　下鉢清子　平林香織　山中土筆　山中たけを
平成三十一年一月十三日首尾・柏市加賀ふるさと会館

えひめ俳口全国連句大会に参加して

荒木　鑑

昨年四月に第二十三回えひめ俳口全国連句大会に参加しました。前年の同大会で松山教育長賞に入賞し、夢よもう一度と昨年も応募したところ、今度はテレビ愛媛賞に入賞、図らずも二年連続で道後温泉にある正岡子規記念館での表彰式に臨みました。

表彰式の後、全国から集まった大会参加者が十二の座に分かれて実作会を行いました。顔見知りの方はもちろん、初めてお会いする方も同志の気持ちから、旧知のごとくすぐに打ち解けて、とても楽しい実作会でした。

私が連句を始めたのは平成十八年です。所属していたテニスクラブの会員で、猫蓑会の会員でもあった豊田好敏氏が、クラブで連句会をやろうと提案されたのが発端でした。テニスのかたわら俳句にも興味を持った方々もいて、その後現在に至るまで、クラブの一室で連句会を続けています。私は当初はおよそこの種の文芸には疎く、酒を飲みながら皆と歓談することを目的に参加していました。

その後平成二十四年から「むさしの連歌会」に属して連歌も始めました。猫蓑会には平成二十七年から参加させて頂いています。今回、俳口大会で入賞といっても、私は捌をやっているだけで、作品の九割以上は連衆の句なのです。当然のことですが連衆の方々が入賞されたのであって、私はいわば手続きの代理人です。

よく豊田先輩は連句の捌をテニスのダブルスと比べていらっしゃいました。ダブルスは自分の力もさることながら、パートナーの実力を最大限発揮させることが大事なのだと。時にはパートナーの頭を越すボールを拾いに走ったり、パートナー側に落ちたネット際のボールを代わりに拾いに走ったりします。腕前は三流なのですが、パートナーが力を発揮できるよう、正に球拾いの役に徹するのが私のテニスの流儀です。テニスも連句も豊田先輩の言を今も密かに心に留めています。

テニスクラブでの連句会も、今や毎月ベースが一グループ、三か月毎が一グループの規模になっています。まだまだ酒とワインの会の域を超えていませんが、先輩の蒔いた種を大事に育てて行きたいと思っています。

昨年・一昨年の俳口全国連句大会で入賞できたことは、ひとえに猫蓑会の先輩と会員の皆様のお蔭と、改めて心から感謝する次第です。

井上井月・馬場凌冬の俳諧

『新編　井月全集』（井上井月顕彰会）より
井月・凌冬・まだら

伊那の漂泊俳諧師として知られる井月（文政五年1822～明治二十年1887）は、発句の他、多くの俳諧連歌（当時連句という言葉は使われていなかった）も残した。平成三十年刊の『新編　井月全集』（一般社団法人井上井月顕彰会）は、様々な形式の六十七巻の俳諧連歌を収録している。その中に、同じ伊那の俳諧師、馬場凌冬（天保十三年1842～明治三十五年1902）と一座したものが十一巻ある。多くは両吟だ。凌冬は、私たちの先師、根津芦丈翁（明治七年1874～昭和四十三年1968）の俳諧の師。

幸い井上井月顕彰会のご許可をいただき、両吟歌仙三巻と、両名にまだらを加えた三吟半歌仙一巻を転載させていただくことができた。感謝の他ない。

テキストは同書により、各巻冒頭の番号も同書所収俳諧連歌の通し番号によるが、形式名、面の記号、編注は猫蓑通信による。踊り字も開いた。同書の懇切なルビの多くを踏襲させていただいたが、歴史的仮名遣いとし、一部加除した。独自の読みに換えた箇所もあり、それらすべての責任は猫蓑通信にある。

資料はないが「まだら」は凌冬の妻、那美女の別号か。俳諧でも凌冬の片腕として活躍、凌冬歿後、凌冬の円熟社を芦丈に委ねた。興行の場「呉竹亭」は凌冬の庵号で、夫妻の住居でもある。今回転載させていただいた四巻の巻かれた明治十年には、数え歳で井月五十六歳、凌冬三十六歳、那美女二十六歳。

五十一　歌仙

明治十年夏於呉竹亭興行

俳諧之連歌鯉鱗二　※

撫子や咲ぶりに名のあやまたず　凌冬
馴て村なく湿るうち水　井月
旅立の仕度疾より気配りて　冬
囉ひし魚に利す薄塩　月
吹送る雲間の月の見え隠れ　冬
早稲はしつかり物と成けり　月
ウ　司召首尾よく済てあとの酒　冬
撫言葉にて嬉しがらせる　月
今更に引れぬ恋の人頼み　冬
河豚とうなづく窓の目くばせ　月
積で有炭の俵の雨暴て　冬
通り少なき足柄の関　月
雁がさの痒み覚ゆる月の頃　冬
寺から里へ贈る茹菱　月
羽を切て蜻蛉這する徒に　冬
薬ときけば戴いておく　月
花も有流れも有て桟造り　冬
手際を誉る重の草もち　月
ナオ　笑ふにもはづみのぬける壬生踊　冬
捻り煙草に廻りかねる火　冬
注進にお迎の出駅外れ　月
鱧を割し腕の巍　冬
国がたの訛りはもはやとれにける　月
文の封じを括るきぬ糸　冬
染にける油単の紋の陰日向　月
雪に絵をかくぬり杖の先　冬
返らぬは死に害ねたる不忠もの　月
朽し花表に新しき宮　冬
友減りに月はますます照り亘り　月
兎らしきを祭る豺狼　冬
ナウ　弁当の粟飯分て味噌ほしき　月
一寸乗ても眩暈する船　冬
梵論達は西と東へいそがるる　月
双六盤に朱の入し骰子　冬
花を守心の奥のつれづれに　月
塵嵩ばりし軒の鳥の巣　冬

右満尾

※編注：鯉鱗（鯉鱗行）は俳諧歌仙の別名。「二」とは、続く五十二番の三吟歌仙（略）と一組としてのこと。

五十三　半歌仙

透間さへいとふ夜風や鴨の声　まだら
榾にぬくもる餅好の友　井月
違ふたる畑反別を改めて　凌冬
洗だく物を積かさねけり　ら
里だけに低うも月のさしかかり　月
午房を引に遣ふ杭さき　冬
ウ　こほろぎのまた出て鳴て石の下　ら
残されし身をかこつ初陣　月
水鏡見て水替る銅盥　冬
越後縮の分て涼しき　ら
一喧嘩済て祭りの馬鹿ばやし　月
太白入し餡の上品ン　冬
すつぱりと月の支度もととのひて　ら

鮎まだ渋ず市に直の利　月
休みなく彼岸の鉦を叩く也　冬
人ぞよめきに孫もつれ立　ら
毛せんに気色もたせて花の雪　月
夏を隣りてふとる川おと　冬

右各六句、明治十年丁丑八月五日
於呉竹亭北窓下興行

編注：興行日付が八月なのに冬から始まる理由は不詳。

五十四　歌仙

明治十年九月初旬於呉竹亭興行
俳諧之連歌両吟

粟の穂や雀がつけば又撓む　凌冬
夕日てかてか月になる空　井月
沢水の流るる音も躬に入て　冬
古屋の売をきき合すなり　月
ウ　藕に巣作る蜂を取尽し　冬
埃りをいとふ草もちの片器　月
夜の雨の朝から晴て御身拭　冬
長くかかれど出来ぬ髪ぶり　月
媒の人さへ憎く思はれず　冬
夢見し鷹を終咄しけり　月
新嘗の祭りはいつも穏かに　冬
醸酒やの遠き道のり　月
揚泥を蟹這まはる月明り　冬
芋にふたする鍋のかたがり　月
只一つ際りで納まる雷の声　冬
事触らしき旅のものいひ　月
状そへて洒落に贈らる花の枝　冬

ぬるみし川で洗ふ塩鴨　月
ナオ　立初し虹の消込筑波山　月
蹲踞てゐる狆の愛らし　冬
東宮は典侍や内侍に傅れ　月
鏡を撫る徒然の袖　冬
白浪と咎めらるるも恨めしく　月
青鬼灯を除て石きる　冬
此夏はねつから捌ぬ心太　月
論が済ても何か紊語く　冬
めそめそと泣ては笑ふ狐つき　冬
浅茅が原に斃れ臥す馬　月
月代をたどりて戻る鉢坊主　月
動くやうなる焼帛のかげ　冬
ナウ　松茸を飯に焚ほど強られて　月
鏟の中の釘を撰ぬく　冬
子を捨てからも彼是五六年　月
妄書したる橋の欄　冬
花守の客を伴ふ腰扇　月
渋のよく利軒の陽炎　冬

右満尾

五十五　歌仙

豊の明り桧垣の茶屋のもん日哉　井月
長いもの佩す袴着の供　凌冬
よしあしの兎角は酒に任すらん　月
好み好みの業に賢き　冬
海鳴りのしてから月は澄わたり　月
浮つ沈みつ山陰の雁　冬
ウ　秋寒み僧都のもとの便りきく　月

きりかぶ踏しあとに膿もつ　冬
紫の朱を奪ひる女帯　月
征がかりで外されぬ恋　冬
葉柳にたまたま風の来る二階　月
瑕の入たるまだら水晶　冬
孫六か鎚音都？□に　月
犠らしき鵙の草ぐき　冬
角力場を透して通る道の端　月
かがなべて見る米買の銭　冬
兼てなき身とは思へど花ざかり　月
ナオ　蓑の埃りを払ふ春雨　冬
釈奠の前から書に栞して　冬
眼に珍しき精進の皿　月
衰た様とはいひど田地持　冬
娘ひとりに困る両親　月
命まで助る程に契りして　冬
今は秘蔵に成し血達磨　冬
羊羹の粘りを拭ふ竹の皮　冬
友なつかしき初雪の松　月
大鷹の小熊驍く睨つけ　冬
用心せねばならぬ昼鳶　月
月の雲覆ふて凄き拝殿に　冬
ナウ　礫をきかす梨子の鈴生　月
蔵の背中の並ぶ木更津　冬
駒は手に卓散あれど負将棊　冬
わたり按摩の宵々の笛　月
床活にする丈花をねだる也　冬
蝶の影さす文台の塗　月

編注：発句は初冬。五十四番の約一月後の興行か。

温故知新

19：歌うネアンデルタール

●音楽と言語から見るヒトの進化

スティーブン・ミズン（Steven Mithen）著
『歌うネアンデルタール』早川書房 2006 年刊

認知考古学者スティーブン・ミズン（英国レディング大学人間環境科学部長）は、最近は主として農耕の始まった時代について研究考察しているが、かつてはもっと古い時代、ネアンデルタール人についての、浩瀚な著書二冊を代表作としていた。その第一作、1998年日本語訳刊の『心の先史時代』（青土社）については、すでにこの「温故知新」シリーズの第七回（猫蓑通信第八十七号）で紹介している。「認知考古学」とはまさに温故知新そのもののような学問分野で、それについてはシリーズ第七回を参照していただきたい。今回とりあげる『歌うネアンデルタール』は、彼らの言語を考察したその続編だ。

近年、自然科学の「定説」は次々に覆っている。かつてホモ・ネアンデルターレンシスとホモ・サピエンスは分岐した進化の二つの枝で、併存しつつも交差せぬまま、前者は絶滅したと考えられてきた。だがごく最近のゲノム解析技術の進歩により、アフリカ南部土着の人達を除く現代人すべてが、ゲノムのなかの数パーセント、ネアンデルタール由来の部分を持っているとわかった。ネアンデルタールは完全に絶滅したのではなく、我々全員のなかに、その一部として混じり込み生き続けている。アフリカ南部が例外なのは、その混交が中近東やヨーロッパで起こり、その結果の遺伝子が世界に広がったものの、アフリカ南部には及んでいないためだ。

この二冊の本はそのことが知られる以前に書かれたもの（本書原著は 2005 年刊）で、最近のミズン教授がネアンデルタールについて何を考えているか、興味深いものがある。しかし、思考と想像を刺激する点で、この二冊の持つ力も未だ衰えていない。

ネアンデルタールの能力については毀誉褒貶の波がある。かつて彼らは死者を葬送していたと考えられたが、その後否定され、数十年前まで、そういう象徴能力だけでなく、どんな言語能力も持たないと考えられてきた。喉頭が低い位置にあり、その位置では現代人のように複雑微妙な音声コントロールができない、などの理由だ。しかしこの定説も覆った。化石資料が増え、解析技術も上がった結果、喉頭は現代人と同じ高い位置にあり、喉頭をコントロールする神経が通る頭蓋骨の穴も、現代人に劣らず太いとわかった。つまり、我々と同等かそれ以上の音声コントロール能力を持っていたのだ。

それでも彼らは「認知的流動性」を持っていなかったので、個別に優れた技能を持っていても、それらを相互に連関させて、複雑で汎用性、発展性のある創造力に結びつけることはできなかった。それがミズンの前著の主張だ。そのような脳の構造、機能からすると、ホモ・サピエンスの言語のような階層構造と汎用性を持つ「分節言語」を彼らが操ることはできなかったはずだ。では、彼らはその優れた音声コントロール能力を使って何をしていたのだろう。最大限乱暴に要約すると、それが『歌うネアンデルタール』のテーマだ。小さい字の大判で四百ページに及ぶこの本を、二千字で要約するのは至難の業だ。

同じく乱暴にその結論を要約すると、彼らは音声を使って、高度に複雑な非分節的言語とでもいうべきものを操り、互いにコミュニケーションしていた。それは音楽に非常に近い何か、音楽と言語が未分化な何かだ。だから彼らはみな絶対音感を持っていた。分節言語なら相対音感で操れるが、彼らの「言語」はそうではない。その「言語」についての同書の説をここで詳しくは説明できないが、同様の能力はホモ・サピエンスに進化する直前の我々の祖先も持っていたはずだし、我々の中に、また我々の言語の中にもその痕跡があるはずだ。我々の「歌」や音楽もその一つだし、詩歌でも、言葉の持つ純粋に音としての印象が、時にその意味以上の説得力を発揮することは、詩歌の好きな人なら誰でも知っている。

子供の頃、ポール・アンカやプレスリーの歌を意味もわからず口まねして歌った経験からも、確かにかなりのものがそこで伝わっていたと思う。歌詞に複雑微妙な意味を託し、ノーベル文学賞を受賞したディランの歌ですらそうだ。今、BABYMETAL の世界ツアーで、日本語を理解しない現地の大観衆が日本語の歌詞を一緒に唄い叫び、熱狂する。お父さんに肩車してもらった四、五歳の子供まで。

脱線しかけたが、ネアンデルタールについての毀誉褒貶はこれからも続くだろう。本書の主張の当否もまだわからない。しかし本書の魅力は主張の当否だけではない。本書には言葉と音楽をめぐる考察の歴史や、動物学、古生物学、考古学、認知科学（脳科学の一種）などの、関連する事柄の数々が網羅され、思考や想像を刺激するさまざまな知見や考察が満載だ。それに、著者の視線が過去から未来を行き来する時間スパンの長さが何よりの魅力だ。

モトクロスバイクで荒れたコースを走るとき、直前の地面を見て走ると必ず転倒する。早く確実に走るには視線の中心をなるべく遠くに置かねばならない。現代はそういう時代ではないだろうか。（斎）

事務局だより

●今号に掲載の猫蓑会定例行事作品

・令和元年十月二十四日（木曜日）江東区芭蕉記念館にて第百五十一回猫蓑会例会（芭蕉忌正式俳諧・明雅忌）が開催され、七卓に分かれて源心を巻きました。当日の源心七巻と、正式俳諧二十韻は今号の八ページ以下に掲載しています。

・令和二年一月二十六日（日曜日）アルカディア市ヶ谷にて、第百五十二回猫蓑会例会・令和二年初懐紙が開催され、七卓に分かれて歌仙を巻きました。今号の四ページ以下に掲載しています。

●既往行事の未掲載作品

・令和元年七月二十五日（木曜日）江東区芭蕉記念館にて開催の第百五十回猫蓑会例会・猫蓑会総会
歌仙七巻

・令和元年六月二十三日（日曜日）新宿ワシントンホテル新館にて開催の第二十九回猫蓑会同人会総会
歌仙六巻

・平成三十一年四月二十四日（水曜日）亀戸天神社藤祭にて開催の第百四十九回猫蓑会例会　二十韻九巻、および藤祭奉納正式俳諧興行二十韻

・平成三十一年一月二十六日（土曜日）アルカディア市ヶ谷にて開催の第百四十八回猫蓑会例会・平成三十一年初懐紙　歌仙七巻

・平成三十年七月二十六日（木曜日）江東区芭蕉記念館にて開催の第百四十六回猫蓑会例会・猫蓑会総会　歌仙七巻

・平成三十年六月二十四日（日曜日）新宿ワシントンホテル新館にて開催の第二十八回猫蓑会同人会総会　歌仙七巻

・平成三十年四月二十六日（木曜日）亀戸天神社藤祭にて開催の第百四十五回猫蓑会例会　二十韻八巻、および藤祭奉納正式俳諧興行二十韻

・平成三十年一月十四日（日曜日）ホテルグランドヒル市ヶ谷にて開催の第百四十四回猫蓑会例会・平成三十年初懐紙　歌仙九巻

・以上の各作品は、次号以降に順次掲載の予定です。必ずしも開催順序通りの掲載にはなりませんが、ご諒承下さい。

●今後の行事予定

・令和二年四月の亀戸天神社藤祭が中止になり、関連する猫蓑会例会、正式俳諧も中止になります。

・令和二年六月二十七日（土曜日）第三十回猫蓑同人会　新宿ワシントンホテル新館にて

・令和二年七月二十三日（木曜日）猫蓑会総会（第百五十三回猫蓑会例会）江東区芭蕉記念館にて

●受賞作品

・平成三十年第二十二回えひめ俳句全国連句大会

愛媛県教育長賞　歌仙「白服の」奥野美友紀　捌
松山市教育長賞　歌仙「秋寂ぶ」荒木　鑑　捌
テレビ愛媛賞　歌仙「軟東風」石川　葵　捌
庚申庵倶楽部賞　歌仙「寒の水」御園魚彦　捌
俳句賞　歌仙「藍涼し」高塚　霞　捌
俳句賞　歌仙「二十歳より」倉本路子　捌

以上は今号十二ページ以下に掲載。

・平成三十一年第二十三回えひめ俳句全国連句大会

松山市長賞　歌仙「大陸の記憶」石川　葵　捌
テレビ愛媛賞　歌仙「庵は今」荒木　鑑　捌
愛媛県連句連盟会長賞　歌仙「古地図」平林香織　捌

以上は今号十五ページ以下に掲載。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・浅野黍穂様　令和元年九月　一万円
・深川連句会様　令和二年二月　十万円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●新入会員

・瀧村小奈生（愛知県）　令和元年七月入会
・梅田君枝（福井県）　令和元年七月入会
・白崎ひろ子（福井県）　令和元年七月入会
・橋本枯野（福井県）　令和元年七月入会
・丹下　誓（神奈川県）　令和元年十二月入会

●会員のご逝去

・伴野末季様が令和元年六月に永眠されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

・松原昭様が令和元年十月に永眠されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

季刊　『猫蓑通信』第百十一号
令和二年四月十五日発行
発行人　猫蓑会　青木秀樹
〒182・0003
東京都調布市若葉町2・21・16
編集人　鈴木了斎
編集委員　奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・高塚霞・武井雅子・平林香織・御園魚彦
（五十音順）
印刷所　印刷クリエート株式会社